

現代文化の止揚

藤永太一郎*

未来について多くの議論がされるようになった。この場合、大切なことは未来を定義して始める事である。この年度末までの話なのか、十年先のことか、または百年先までのことか、或いは人類の滅亡とか宇宙の終焉まで考慮に入れての話なのかを先に決めておいてから始めるのでなければ噛み合わないからである。

そこで私の話であるが、精々数十年先までの筈であったところ、それが人類滅亡までの話という事になった。従来両者は次元の違う話であったので人々は別々に評価したものである。ところが人類の滅亡が、ひょっとすると子や孫の時代かもしれない程現実味を帯びてきた。どうして急にそうなったのか。どうすれば止めることができるのか。自然科学の立場から素朴に考えることにする。

<知性は退化したか>

1866年、化学者であり大化薬会社社長でもあったノーベルはダイナマイトを発明し土木工学に大きな貢献をした。ちょうど普仏戦争を前にした時代であったが、これが大量殺戮に使われることを憂い、兵器としては製造供給しなかった。よく知られているように、その莫大な遺産をノーベル賞の設立に寄贈したのである。

それから半世紀後、第一次世界大戦

ではドイツ軍が毒ガスを兵器として使うという過ちを犯すが、1919年、戦いが終わるとパリ講和会議で直ちに世界中がその全面禁止を決めている。

更に四半世紀下った前大戦では~~同様~~どうであったか。破廉恥にも一部の物理学者が新知見であった核分裂現象を平和目的ではなく、いきなり大量殺戮兵器として開発するよう進言し、そのマンハッタン原爆計画に協力したのである。1945年に使用されたその悲惨な結果については改めて言及するまでもない。それかあらぬか以来50年を経ても今も廃絶の気配さえみられない。今日までの130年間に行われた三大戦の経過をみる限り、人類は時と共に次第に愚かになっているように見える。

<速すぎる定向進化>

カブトガニは一億年以上前に生まれたが格別進化せず、従って個体数も増えないが今も絶滅する気配はない。他方その後から生まれた恐竜は急激に巨大化して他の生物を圧倒したが、頂点に到達してからは比較的速やかに滅亡した。同様にマンモスは牙を大にし、アイルランド・ヘラジカは角を大きくして発展したが、その進化の結果いずれも急に滅亡した。

ちなみに生物が固有の長所を伸ばすこのような現象を orthogenesis 《定向進化》という。

*研究所長・京大名誉教授、本講演要旨は、96年10月18日に行われた、京都工芸繊維大学地域共同研究センター・京都リサーチパーク（株）主催によるKIT産学交流フォーラムにおける講演にもとづいて作成したものである。

ヒトは四百万年前に誕生したといわれるが、四百年前までは格別進化せず、個体数も三億をこえることはなかった。その人類史の最後の0.01%の期間に六十億に達し、国連によると2050年にはその二倍になると予測している(図)。

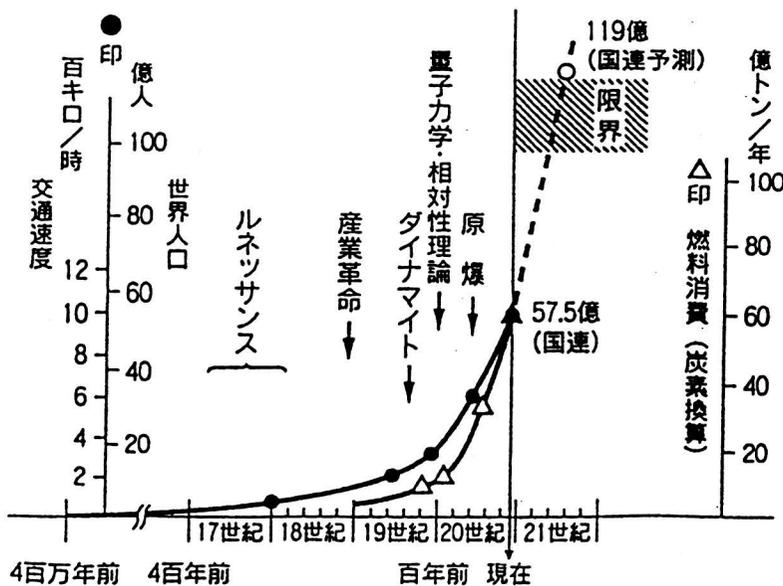
この幾何級数的増加は、現代文化を支える消費や生産の指数とも並行している。百億を超える平成五十年には、限界状態に到達する、と多くの自然科学者は見ている。

この人類の著しい増殖は、ルネッサンス、産業革命から始まるが、それはヒトが知性を進化手段として認識したことにもとづく定向進化現象である。この定向進化は1900年まではほぼ矛盾なく作動し、量子力学や相対性理論と

いう科学における世紀の発見に象徴されるような発展を行って全生物の頂点に立つようになった。

二十世紀に入ると科学と技術の力関係が反転し、また経済が技術を利する社会構造ができ上がり、この両輪によって文化が急加速されたので知性による判断と制御がしばしば後手にまわるようになる。

原爆もその一例にすぎない。阪神大震災においても地上は人口技術の粋が尽くされていながら直下の活断層に関する自然科学研究は皆無であった。このような現代文化の矛盾はいくらでも挙げることができるし、今後も激増するだろう。つまり、人類もまた破局的定向進化の時代に入ったのである。



(図) 百年前の世界人口(15億)、年間燃料消費(10億トン)、最高交通速度(時速200千キロ)は、ヒトが知的活動を継続して行うのに必要十分な条件を満たしている。

<限界に近づいた人口>

国連は先月、現在五十七億五千万の人口が、2050年には百十九億になると発表した。人口が百億を越えるとエネルギー、資源、食糧環境が順次行き詰まるという。それが平成五十年に到来するのである。

地球環境も大きな転換期にある。ここ一万年は、緩やかな温暖化の続く比較的穏和な気象に恵まれてきた。このことは人の急速な定向進化と無縁ではない。最近の古気象学によると、十万年のサイクルと一万九千年サイクルの寒冷期が一万年前に同時に終了し、現在次の寒冷期サイクルに入る間氷期の頂にある。従って当面温暖化から寒冷化への遷移期特有の激しい気象不順が続き、それは水象地象にも及ぶと考えられる。それはまた、人の生理や心理に厳しい効果を及ぼすだろう。事態は差し迫っている。

<次世代文化の創造へ>

今やヒトはその存在自体が環境破壊的なのである。あえて言えば、ヒトが現代文化を延長すると絶滅に突入することは必至だが、絶滅すればヒトが望むよき自然環境はすぐ復元する。現代社会は実益主義によって、低開発諸国を蚕食しているだけでなく、実は、子や孫など将来の世代の幸せと命を侵食しているのである。

このような終末的自己矛盾に行きつかないためには速やかな現代文化の止揚、そして知性によって制御される「主知主義」への思い切った回帰が残されているのみである。現代の技術依存の経済社会を延長するのではなく、限界の近い富と権力とを等しく分配しあ

う社会・文化をつくらねばならない。

このためには知性にもとづく試行錯誤の機能する秩序確立まで、技術開発、経済発展、それに由来する人口伸長をスローダウンしなければならない。目標は先述した十九世紀末水準である。これは「店じまいの文化」とよばれてよいだろう。

現代社会では発想が反対になっている。技術や景気の進展に努めれば一層人口が増えるのである。二十世紀初頭の世界恐慌と二度の大戦にこりた人類は、景気上昇と経済拡大のみが平和と幸福をもたらすと誤って信じている。本来であれば不況時には値下げして利を薄くし給与を減らして減らしても雇用を増やすとともに、衣食費を切り詰め、質素に暮らすべきところである。プラスがあればマイナスの世界も同様に機能しなければならない。すべての生物はこの自然の法則の下で生存している。

このような「店じまいの文化」の社会は、決して人が恐れるような無気力なものでも、空想的なものでもない。人々の意欲的で幸福な世代は、かつてギリシャや中国などいくらかも存在した。現在も都会を離れる人は先進国にも少なくない。それらの人が科学、社会奉仕、芸術などさまざまな分野で大きな意義のある仕事をしている。

人は実益のためでなく、真(科学)善(道徳)美(芸術)を自らの説(ヨロコビ)のために追求するのであり、実体は意欲にみちた、それでいて平和で幸福な、ただしつつまじやかな理想社会であるべきなのである。バベルの塔はまもなく崩れ落ちる。心して野に咲く百合を求める秋である